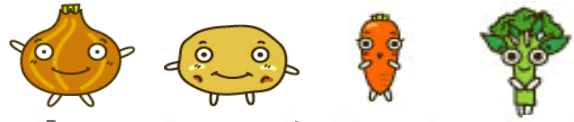


第13号



平成24年3月 日発行

編集局 J A山口中央会



# 集落営農法人だより

## 全検討部会 合同開催 第4回経営複合化部会 「集落営農法人の活動強化のための女性の役割について」

2月17日(金)、山口市のセントコア山口で全検討部会員(経営管理部会、経営複合化部会、普通作部会、人材確保育成部会)を対象に検討会を開催し、会員法人・県・JA関係職員など約130名が出席されました。

午後からのワークショップでは「**法人経営に対して、私たちができるアイデアを考えよう**」をテーマに、集落営農法人の活動強化のための女性の力、視点を活用した「**女性の役割**」について検討・協議しました。

田中会長は、「このテーマに多くの会員が関心を持たれたことを大変嬉しく思う。このように多くの女性構成員が出席され、法人経営に明るい兆しを感じる。集落営農法人は130組織を突破し、3月末にはさらに増加予定である。このように法人化が急速に進んでいるのは、担い手の高齢化により、地域農業の維持が深刻な課題となり地域社会の維持までも困難な状況になっているのが背景となっているのではないだろうか。法人が担う農地集積率は、県下で十数パーセントだ程度であるが、2～3割となれば、かなりの大きな力になる。期待が大きくなればさらに法人化が加速化するだろうが、次は質が課題となる。県法人連携協議会では4部会を立ち上げ、課題解決に取り組んでいる。ぜひ、この検討会を機に多くの会員が参加し、互いの課題解決に向け、取組んでいきたい。

法人化により機械化すると、オペにわずかな補助者がつけば成り立つので、当初は女性は弾かれるしくみになりやすい。しかし、このままでは担い手は確実に高齢化し、何年かすると先が見えなくなり、次に複合化を考え、女性をどう活かすかという発想が出てくる。これからは、女性の力を活かさない法人は暗い。女性の視点を大切に。野菜づくりなどの園芸、加工などの6次産業化の分野は、女性なしには進められない。

集落営農法人は、農業を合理的に進めるだけでなく、地域社会を守ることも重要。集落の半分は女性であり、女性の力が必要。すでに、法人で理事をされている方、法人での活動が期待されている方、本日の会でこれからの活動のヒントを持って帰って欲しい。」と挨拶されました。



次に、本協議会顧問である山口県農林総合技術センターの堀信雄所長から「女性はこのからの日本の潜在力の最たるもの。社会のあらゆる場面に女性が参加し、その能力を発揮いただくことは、社会全体の多様性を高め、元気な日本を取り戻す重要なカギ。日本の再生の担い手である女性が、社会の中でさらに輝いてほしい。」これは、野田首相の政策方針演説の一部で、日本経済再生に臨む方針で述べた言葉。この後に農業、エネルギー・環境、医療・介護等の21世紀の成長産業おなる可能性と続く。

私も、「女性が単に補完的、補助的に留まらず、農業で主体的に参加し、役割発揮されることは、農業・農村の多様性と活力を高め、元気な山口県農業の再生する、取り戻すための重要な鍵だと考えている。しかし、総論では誰もが賛成だろうが、現状ではまだまだである。真に女性が能力発揮できる体制づくりが、山口県農業の未来が拓けるかの別れ目になる。女性に逃げを打つ気はない。元気のあるところは、女性を受け入れ、幅広い組織でないと伸びない。総論から更に先進し、厳しい社会情勢の中ではあるが、次の世代にバトンタッチしていくことを普遍化できるのが法人の力。県、農林総合技術センターにはいろいろなセクションがある。皆さんの思いを聞き、一緒に課題解決していきたい。実りある研修会となることを願う。」と激励の言葉を頂きました。

全国町村会の坂本誠調査室長は、県内の周南市大潮地区、萩市木間地区、山陽小野田市石塚・不動寺原などの中山間地域において「地域のしくみづくりや自治」について研究されており、地域の中での女性の役割について、『①集落営農法人の複合化が必要になっていること、②複合化で女性が重要であること、③女性の参画をどうすすめるか。』の3つのテーマを基に説明されましたので紹介します。

### ■集落営農法人の今後の課題① 担い手（後継者）の確保

設立された集落営農法人の5年後、10年後を見据えどのように事業運営・展開していくかを考える必要がある。高齢化率とは人口に占める65歳以上の割合であるが、50%を越えると地域社会を持続する上で危機的状況になると言われている。しかし、50%を越えるというのは、必ずしも高齢者人口が増加することを意味していない。高齢者人口に変化がないとしても、若者人口が減れば、比率は上昇する。過疎市町の高齢人口増加のピークは過ぎ、むしろ減少に転じている。都市部の方が定年後に現役引退する者が多く、高齢人口増加で高齢化問題は深刻になっている。

農村は65歳以上でも現役で、**高齢者は地域の担い手**である。農村の近くで会社に勤務しながら、週末に農業をし、定年後に担い手となり、会社での経験・知識をもとに能力発揮できる。**農村地域で高齢者が減ることは、地域の担い手が減ることを意味する。今後、集落営農の後継者をどう確保するかが課題**となる。

### ■集落営農法人の今後の課題② 収益安定性の確保

山口県の平成20年度集落営農法人の損益状況は、平均で経常利益は約400万円あるが、営業外収益（各種交付金等）に左右される経営で、不安定な状況にある。毎年の利益に応じ、従事分量配当制で労務費を調整しているのが現実であるが、新たな担い手を確保するためには周年労働を通じ、安定した労務費を支払える体制を構築する必要がある。**→安定した収入源を確保するためには、複合化、多角化を図り売上高の増大が必要。**

### ■集落営農法人の活動強化における対策とそれに伴う女性の役割

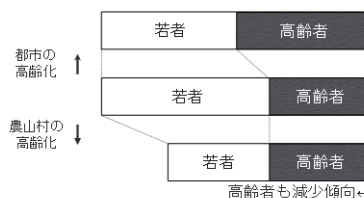
対策には「つながる」と「ひろがる」の2つの方向性がある。

「つながる」は集落営農法人同士の連携で、広島県のファームサポート東広島の事例があり、機械の共同利用等で売上原価の圧縮や広域での担い手確保。同じ目的、共通課題を持つ集落営農法人同士の方が取り組みやすい。

「ひろがる」は、法人経営の複合化・多角化である。農地を守る法人は、地域経営体であり、地域全体、生活福祉も含めて、経営、運営を法人が担い手となることで、集落全体からの信頼が確保できる。「ひろがる」は、「守り」と「攻め」で法人経営を安定化させること。

集落営農の「守り」は、農地維持管理の集団的対応であり、女性の関与は難しい。「攻め」が複合化・多角化であり、攻めの段階で女性の役割は不可欠となる。地域の半分は女性であり、女性は潜在的な地域の担い手である。男性経営主は、全体の1/4でしかない。今回のテーマから外れるが、地域外の人々も潜在的な地域の担い手として重要である。

#### 都市と農山村の高齢化の違い

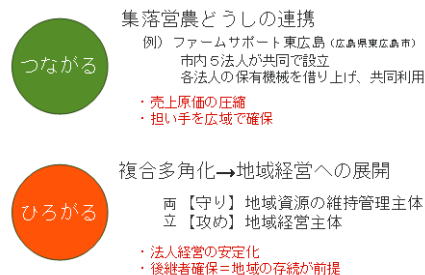


#### 担い手をどう確保しつつけるか

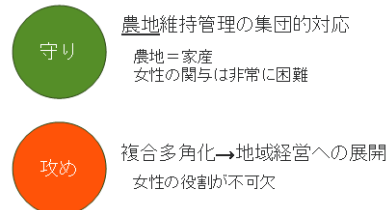


「高齢化＝高齢者が増えていく」イメージ  
⇒現実には、高齢者（担い手）は減り始めている  
⇒集落営農の後継者をどう確保するか

#### 対策の2つの方向性



#### 集落営農の「守り」と「攻め」



攻めの段階において、女性の役割は不可欠

## 女性の力・視点を取り入れた経営参画とその留意点

### ■女性の参画を図るには？

2つの方法がある。1つは、既存の女性の組織や活動と連携すること。山口県は手づくり自治区づくりを推進しているが、既存の地域の自治組織と連携し、婦人会やJA女性部等の既存の女性組織と連携することが望まれる。

広島県の（農）ファームおだの事例では、自治組織の「共和の郷おだ」の農村振興部で集落営農の話し合いをし、営農組織の法人化を支援し、女性組織で運営する「寄りん菜屋（加工・直売・レストラン）」と連携し、地域で運営するしくみがあるので参考にされたい。

もう一つは、女性の声を地域で共有する方法である。女性を集めた座談会もよいが、アンケートで声を集める方法もある。よくアンケートは世帯ごとにするが、女性や若者も含め住民全体を対象にすると良い。例えば、周南市須金での事例では、地域活性化に取り組む主体として「女性グループ」も選択された。当時、女性グループの存在はなかったが、敢えて選択肢に入れたところ、15人が選択、しかも50代女性の2割が回答していたので、その後、女性で「女性が集落に何ができるか」をテーマにワークショップを開催し、実際に女性グループが誕生した。元保育所の空施設を活用し、高齢者の交流サロンや県立大学と連携して特産品開発にも取り組み出している。

留意すべきは、アンケートで女性の声を集めたら、そのままにしない。地域の人と共有し、地域の将来につなげていくことが大事である。

### ■経営多角化における注意点

山口県が実施した住民の経済ニーズの調査結果によると、経済充足のために必要な追加収入は、教育費をもっと必要とする40～50代男性は月10万円以上であるが、60代以上は月5万円前後であり、年間では60万円前後。つまり、年金+アルファ程度であり、それを目標額とすれば良い。

6次産業化と農工商連携はイコールではない。6次産業化は地域内で、2次（加工）、3次（販売・サービス）への展開を図ることが大事となり、農工商連携は地域外の経営体との連携なので、大がかりなことができるが、地域内に落ちるお金は6次産業化の方が大きいかもしれない。

住民の経済的ニーズ

性別	月1万円程度	月2～3万円	月3～5万円	月5～10万円	月10万円以上
男	0.5	6.6	20.7	39.6	32.4
合計	-	10.5	21.1	37.9	30.5
～20代	-	3.4	23.5	47.1	26.1
30代	0.6	3.0	18.3	37.2	40.9
40代	-	3.3	16.3	40.2	40.2
50代	1.4	5.9	15.3	45.5	32.0
60代	0.5	8.6	29.5	34.5	25.9
70代	1.4	21.7	26.1	30.4	20.3
80代～	-	-	-	-	-
女	0.9	10.2	30.5	36.4	22.1
合計	-	13.7	31.6	28.4	26.3
～20代	0.8	8.4	37.0	38.7	15.1
30代	0.7	4.6	29.4	39.9	25.5
40代	0.4	4.0	23.8	41.0	30.8
50代	0.4	7.8	30.4	40.7	20.7
60代	2.1	17.6	34.0	30.7	15.5
70代	1.9	22.3	34.0	25.2	16.5
80代～	-	-	-	-	-

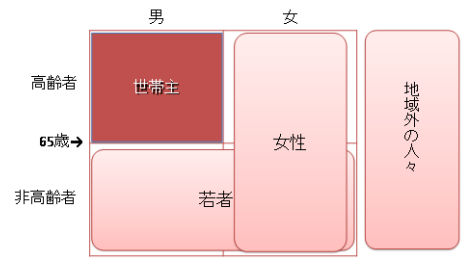
#### ○経済的充足のために必要な追加収入

- ・40-50代男性：10万円以上→教育費をもっとも要する世代
- ・60代以上：5万円前後→必要な追加所得は、年間60万円前後（年金+アルファ）

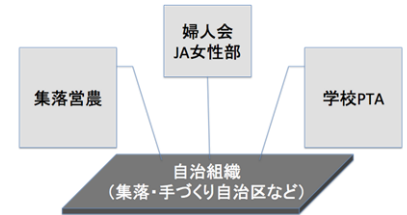
単位（％）

山口県における住民アンケートより「経済的に満足するためには、あといくらの月額収入が必要ですか？」

潜在的な地域の担い手



### 既存の女性の組織・活動と連携する



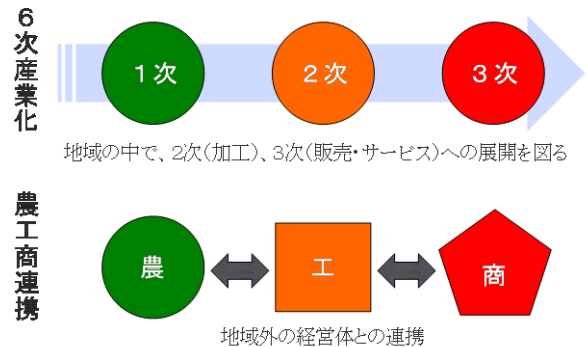
まずは、既存の地域の自治組織との連携から

アンケート結果をもとにしたワークショップを開催



テーマの1つに、「女性が集まれば何ができるか？」を設定

## 6次産業化≠農工商連携



(農) 伊陸美味 代表理事 佐伯則幸氏

「伊陸馬」という言葉があり、2つの謂がある。昔、吉川藩時代に競馬場があり、「馬は、出だしは元気だが、最初だけ」という意味と、奨励していた米を馬で藩に納め、帰りに馬に荷を積んだことから、よく働くという意味がある。馬を「美味い」に例え法人名にした。

伊陸地区は東西10kmの盆地で、木部集落は東に位置し、農家戸数32戸、人口75人、高齢化率38%。平成19年に法人化し、同時に農産加工施設を整備した。出資金55万円の小さな法人であり、施設は設計施工も自分達でやり、1人何役もこなしている。理事6人中3人が女性で男女半々、基本理念は「男女共同参画」。女性理事登用、加工所設置のねらいは、「昔からの農産加工技術の維持・継承、地域の女性や高齢者の活躍の場づくり」である。

経営概要は、水稻、作業受託、タマネギ、小麦の生産と、梅干し、らっきょう、たくあんの加工に。昭和33年から当地域で梅が奨励され、漬物当の加工技術があったが、廃れる恐れがあるので、法人により技術伝承に取り組んでいる。10.51haの耕地しかなく、利用権設定した6haをいかに倍にして利用するかが課題である。新規にタマネギ20aに取り組み、4.4tの実績。作業には最大で18人いて、この集落にこんなに人がいるのかと思うほど。集落の人の一体か、絆を感じることができた。H23年秋から小麦も新たに開始。法人行事は2月総会、4月花見、11月収穫祭があり、役員会は毎月開催している。

法人経営に女性が参画している利点は、①法人が集落の保全を目的としている限り、集落の半数を占める女性が検討の場にいることは当然！ ②その場の雰囲気や和み、男性からの視点だけでものを考えることはなくなり、総合的に考えることができる！ ③女性の力を借りることで新たな品目に挑戦できる。

今後の課題は、人材の確保、後継者の育成。目標は、客に喜ばれるいいものをつくる、機械化による効率化、いろいろな品目の挑戦による経営安定化、集落内の交流を深めることである。

(農) 伊陸美味 理事 松村敏子氏

加工原料の梅は、法人が梅林を管理するので梅は無料で確保している。赤紫蘇も購入するとコスト高なので、法人で生産しているが、梅と紫蘇の量をうまく調整するのが大変である。地域の先輩たちが残した資源や技術を将来に残すため、梅の幼木を植えた。加工品は4カ所で常時販売、イベントでも女性の感性を生かした販売をしている。大袋で梅干しが欲しいという声もある。伊陸美味ふるさとセットにも取り組み、ぶちうまセット、茶がゆセット、梅干しと漬物のセットがある。

地域を守る活動は、オアシスグループ（生活改善グループ）として、①高齢者の見守り活動や②子供たちとの交流活動、③次世代へつなぐ活動に取り組んでいる。高齢者から暮らしの知恵や技を聞き取り、「むら・人・暮らしの聞き書き集」を作成し、集落から出ている子供たちにふるさとの便りとして送付した。期待以上に反応があり、後継者にメッセージを発信し続けることが大事である。

法人設立準備段階から女性3人が関わり、取り組んできた。生活改善グループの活動とは異なり、法人では男女共同参画の面白さを感じる。法人は、営農と加工は両輪であり、お互いを尊重している。男性が梅園の草刈りをしてくれることもあり、あと一步踏み出せない時に背中を押してくれる。タマネギの規格外品の加工にも取り組み、加工活動が周年できるようにしたいと考えている。「木部のおなごはでしゃばりと言われるが、良い意味ででしゃばりたい。」と抱負を述べられました。

(農) 伊陸美味の取り組み内容を説明される佐伯代表



4 女性理事登用、加工所設置のねらい

基本理念は「男女共同参画」

- ・昔からの農産加工技術の維持・継承
- ・地域の女性や高齢者の活躍の場づくり

伝統の味の継承



女性の感性を生かした販売



次世代へつなぐ活動



阿武町福賀地域の5集落で平成15年に法人を立ち上げた。法人化により、私の財産はみんなのもの、みんなの財産はわたしのものとなり、年金+αで女性は何をするかを話し合った。理解されるには時間がかかった。農林事務所の普及員の方などにお世話になり、相談すると、「急いではいけない、話し合いは十分にやらないといけないよ。」とアドバイスを頂き、女性の意見を集約するために、アンケートを実施した。やりたいことは、法人の米で餅加工をしたい、できた時間で野菜づくりがしたい等の意見が集まり、平成16年に48名で女性部を設立。野菜部、環境部、加工部の3部会を女性部の中に設けた。今は、加工で雇用の場ができたが、当初は赤字になるのが不安でもあり、加工施設がないので様子見であった。

平成18年に老若男女が参加して、地域資源の集落点検を行い、みんなの地域をみる目が変わった。女性がこれをもとに夢マップを作成し、コスモスロードを作ろう、小学校は廃坑にしてはいけない、わき水でコーヒー喫茶をして若い人が帰るきっかけづくりをしよう、おいしい米をPRしようなどのアイデアを盛り込んだ。また、女性部の活動目標として、①女性・高齢者の知恵・技を活用しよう、②法人活動へ参画しよう、女性の声を反映させよう、③拠点を活かし、都市農村降雨流を推進しようを掲げた。

加工施設と直場施設は、町から補助を受け、単県事業により整備された。春にはヨモギを摘み、すぐに処理して1年間の加工原料にする。主力商品の餅類、ごはん類に加え、揚げかき餅やかりんとう、蒸しパン等の加工品の種類も増えた。加工研修では和菓子や洋菓子の専門家から指導を受けた。加工活動開始直後はいろいろあったが、今は信頼できる仲間になった。複式簿記も中小企業診断士から学び、少しずつわかるようになってきている。毎月会計が販売状況を報告し、みんなで反省し、問題点を改善する方法を検討している。また、消費者の視点から改善するヒントを得るために「井戸端会議」も開催した。本日講師の船崎さんが抜き打ちで事前に直売所の状況を観察し、後に意見交換で改善点の助言を受けた。少しずつ、仲間の意識が変わり、直売所のレイアウトも明るくなるように改善した。ルーラルフェスタやなしまつり等のイベントも生産部会やJAと連携して開催している。

集落座談会で女性部の活動を報告したところ、「女性が、こんなに頑張るなら理事を出してはどうか」との意見をいただいた。女性が自分名義の口座を持ち、収入を得ることの意義を知ることは重要。今では女性部員は全員が法人の組合員になり、女性部も法人組織に正式に位置づけられ、従事分量配当が受けられるし、男性と女性のパイプ役となれるよう、女性も理事になった。女性は変わった！女性にも時給500円が仮払いされ、総会后に従事分量配当が入る。年金+αの収入が実現した。

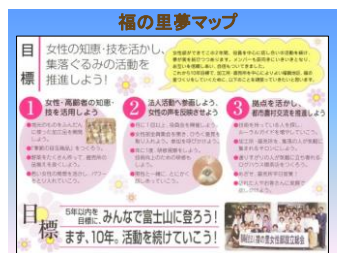
しかし、女性理事の選出は難しい面もある。そこには世襲問題があることも理解できる。みんなで地域や農地を守るしかない。一人一人が責任を自覚してやるしかない。男女共同参画の時代だから、もっと考えるべき。女性が参画するメリットはものすごくある。それを男性は理解し、もっと生かして欲しい。7年経って、もう一度集落点検をやってみた。今から5年経過したら、どうなるか？高齢化が進み、一人暮らしが増加することがわかった。その時、食事の世話は、買い物はどうするのか？これからは、福祉関係のことも法人で考えていかなければならない。これから年12回コースで若い人を対象に勉強会が始まる。私たちの後継者になってもらいたいと期待している。1人1役で、男女ともに支え合い、法人を盛り上げていくことが大事。法人があるから安心して暮らせる。みんなの目標をしっかりさせることが重要であり、理事としての自分の使命だと考えている。



女性構成員の力・視点を活かした法人の経営複合化への取り組みを報告される中野逸子女性部会長



平成17年6月福の里女性部設立



品名	数量	単価	金額	売上	仕入	利益
米	1000	1000	1000000	1000000	0	0
...	...	...	...	...	...	...
合計						

※売上金額は消費税別です

◎毎月の役員会で会計さんが販売状況を報告!

ワークショップ「法人経営に対して、私たちができるアイデアを考えよう！」

午後より、周南市のライフスタイル研究所の船崎美智子氏をファシリテーターとして、参加者が8人グループの15班に分かれ、「法人経営に対して、私たちができるアイデアを考えよう！」をテーマにワークショップを行いました。

ワークショップとは、わいわい、がやがや砲弾会と比喻されるように、参加者がテーマに沿って自由な意見を出し合い、形（シナリオ・ストーリー）にしていくものです。

今回は、集落営農法人の構成員の男性、女性また関係機関もグループに参加し、お互いの意見を出し合い、グループごとで出た内容を発表し、共有しました。以下にグループごとのワークショップを通じた結果・成果を紹介します。



ライフスタイル研究所 代表 船崎美智子氏



ワークショップ風景

1班 わ  
「経営安定」と「交流の づくり」の両方が必要。男性と女性の見方と思いのちがいがあるのがイイ！！



説明内容

法人は「経営安定」と「交流の和（輪）づくり」が両方とも大事だが、話し合いをしていると、どちらかに偏ってしまう場合もある。男性と女性のもの見方と思いには違いがあり、男女の違いがあるのがイイ！ 両方いることが良いという結論に。



ワークショップを通じた成果 3、4班

3班

多様な人を集めて育てる！！



説明内容

多様な人とは、リーダー、オペレーター、加工をやるいろんな人のこと。それを集めて育てる。

4班

住みよいふる里は女性から！



説明内容

いろいろ意見ができたが、コミュニケーションが重要で、女性が元気になれば、住みよいふるさとができるだろうという結論になった。



ワークショップを通じた成果 5、6班

5班

懐を大きく  
一人ひとりの特技を活かせる組織づくり



説明内容

生産するにしても、加工をするにしても、何をするにしても人材育成が重要。組織づくりに向けて、法人が懐を大きくすることが大事だ。



6班

女性部設立は  
3人集まって文殊の知恵だし  
5人集まれば最高！

まずはコミュニケーションから

そして地域を守るという信念をもって





ワークショップを通じた成果 8、9班

8班  
まず参加



説明内容

一番シンプルに、「まず参加」というキーワードになった。女性が野菜づくりをするにしても、地域づくりをするにしても、経営参画するにしても、まず参加して一步踏み出すことが大切。



9班  
コミュニティあつての法人



説明内容

地域に人がいないと法人が成り立たない。地域の中でみなさんの交流や技術伝承を行うためのコミュニティがあることが前提で法人が成り立つ。



ワークショップを通じた成果 11,12 班

11 班  
私たちはフレッシュマン

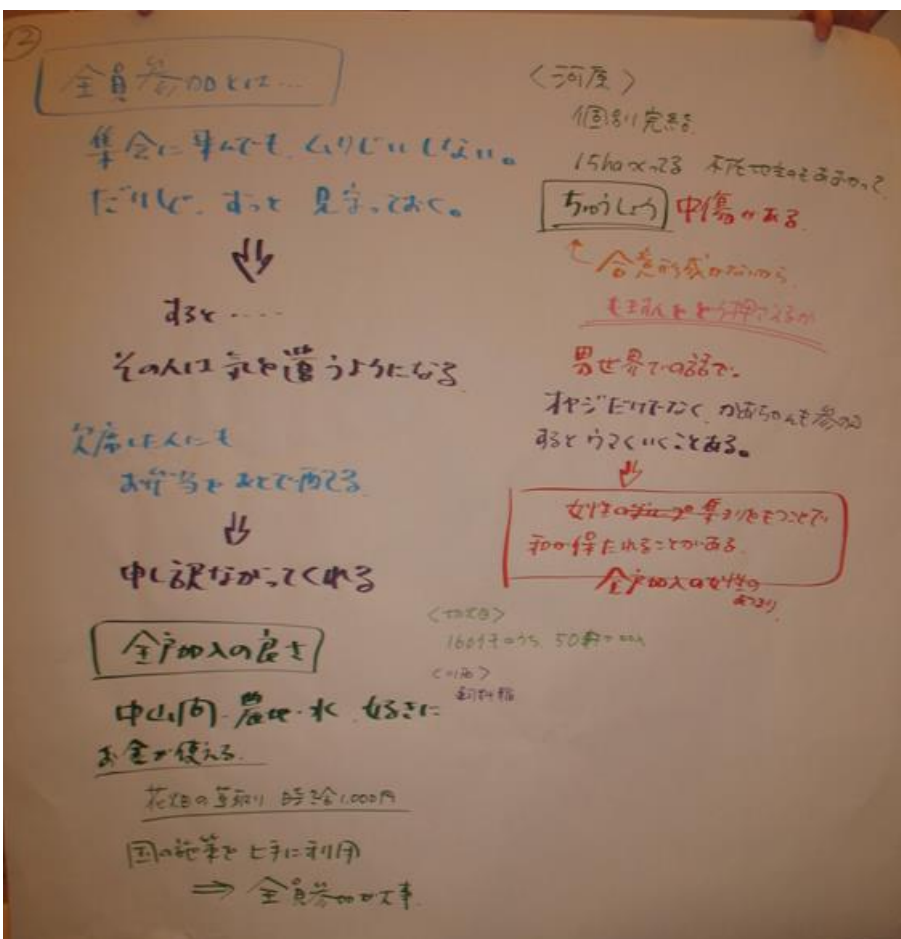


説明内容

私たちはフレッシュマン  
 いろんなことに手探り  
 夢の途中  
 ひとつでも実現していこう  
 ワイワイ ガヤガヤに夢  
 がある  
 ヒントが沢山ある



12 班  
誰もが知っている法人に



説明内容

誰もが知っている法人に  
 集落全戸加入ですすめる  
 法人運営の秘訣

- ① 一歩ふみ込んで妥協点を見いだす
- ② 全戸に女性の集まりを呼びかける
- ③ リジいないけどずっと見守る

やっぱり、集落全戸加入で法人運営できるのがいいよねということで、その秘訣を話し合った。



